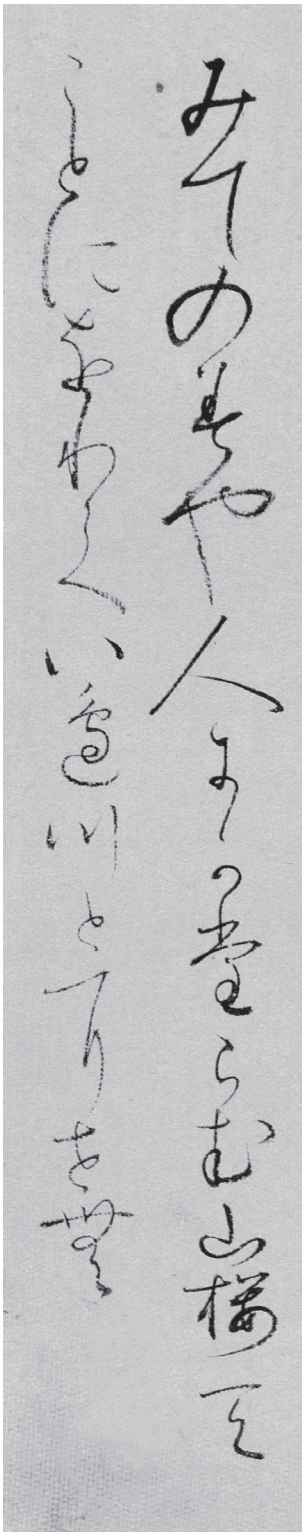
御物和漢朗詠集



昇試随意参考として

『みての美や人尓可堂らむ山桜天ごとにを利弓い邊川と耳世無』

と、特に連綿の呼吸に注意して、半切二行に臨書する。

落款は全体の調和を考えて位置と大きさを決め「〇〇臨」と入れる。

※随意部参考（半紙・条幅）としてもご活用下さい。抜粋可。

一字書（三月二十二日締切）

課題

受

(1)書体自由

(2)半紙タテ　※ヨコは中止

(3)落款は余白に調和を工夫し書き入れる

(4)出品料　四四〇円

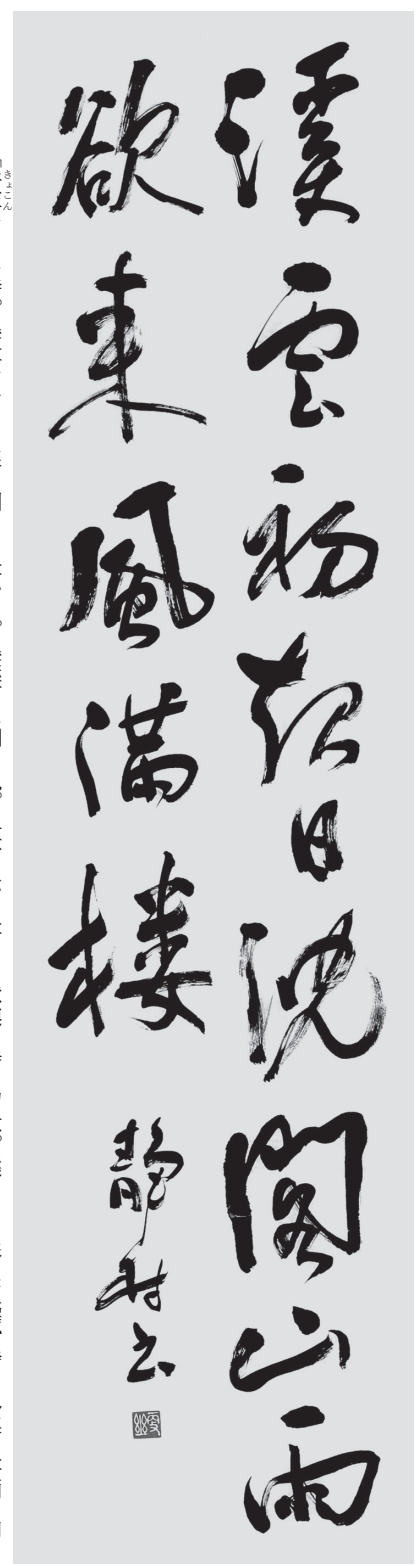
(5)バーコード券貼付　太枠内の臨昇の隣の空欄に

一字と記入　段級は無記入

昇試第一部漢字課題　（三月二十二日締切）

A

鈴木静村先生書



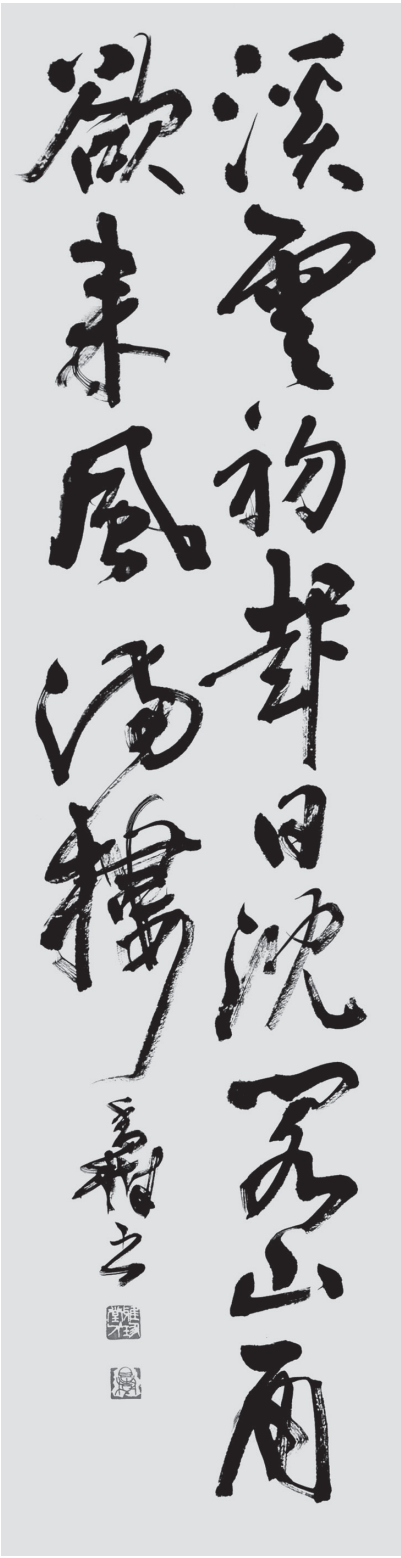
溪雲初起日沈閣　山雨欲來風滿樓（許渾）

溪雲初めて起って、日閣に沈み、山雨来らんと欲して、風楼に満つ。

「許渾（きょこん）」の名詩。墨量を多くし線に潤いと豊かさ。墨継ぎは**閣**と**風**。単体ながら字々の**意連**に特に留意。**溪**　この形は王鐸、旁の〝奚〟字画に即した運筆を。**起**　走繞（そうにょう）の草体に力感。**日**　小さくも鋭く。**沈**　渇筆の円曲線に強みを。**閣**　門構えの線弛みは不可、鋒先を強く。**雨**　右腰に張りを。**欲**　直線味キリッと。**來**　古典は殆どこの字画。**風**　構え重厚に。

B

髙橋香樹会長書



今回は、行書が九字、草書が五字で、一行目を九字と多くし、二行目は五字の構成としました。一行目の「**雲・起・沈**」は左へ張り出し、二行目の「**風・満・樓**」を右に出しながら、それぞれが重ならないようにした。「**起**」はちょっと変わっているが、欧陽詢の作を参考としました。墨継ぎは「**閣**」と「**風**」。

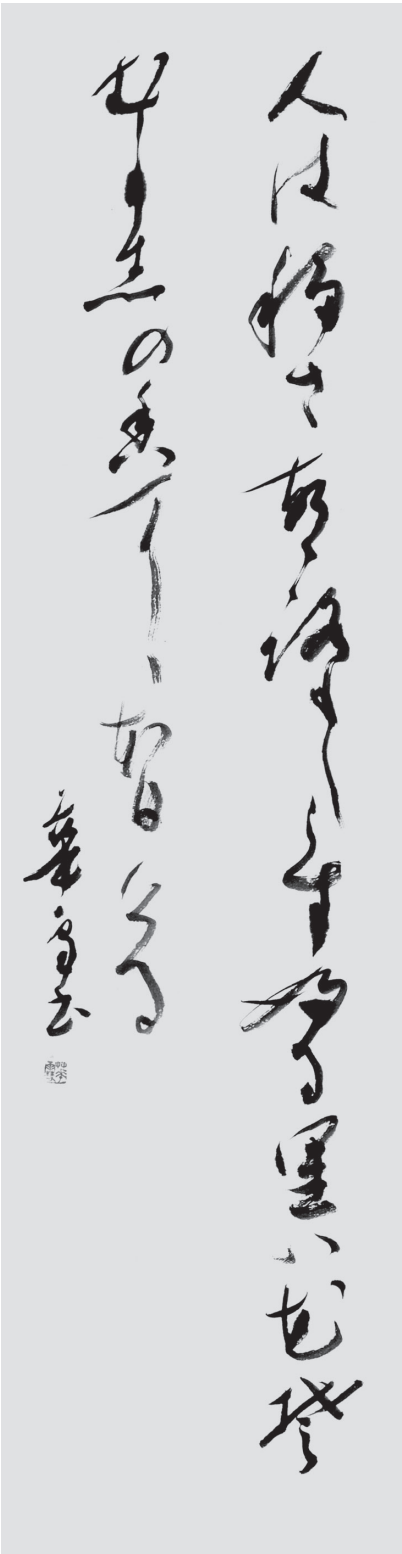
訳…谷間から雲が今しもわき起こって、日は高閣に沈み、山から雨が降ってこようとして、風が楼をつつむように吹きわたる。

予告（四月二十二日締切）　**國破山河在　城春草木深　感時花濺涙　恨別鳥驚心（杜甫）**

◆**注　意**　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第一部かな課題　（三月二十二日締切）

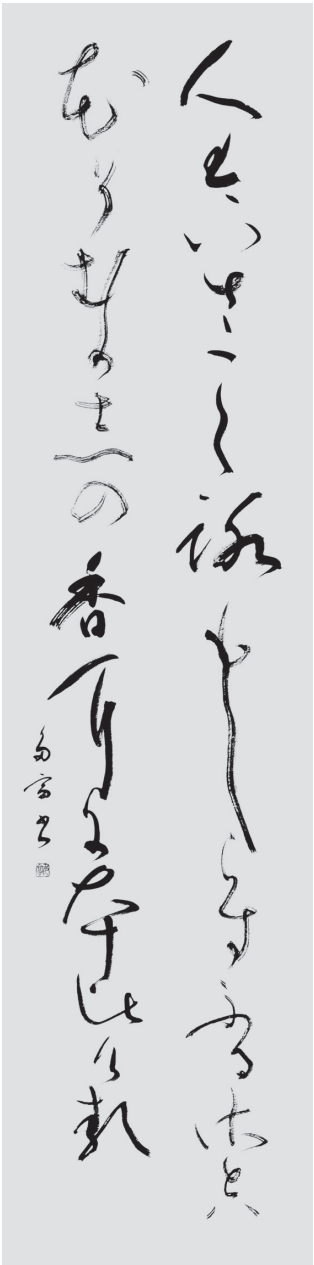
A



平岡華雪先生書

ひとはいさ心もしらずふるさとは花ぞ昔の香にゝほひける（古今和歌集　紀貫之）
人は移さ故、路もしらす婦る里八花楚む可志の香耳、本日介る

B



森多富先生書

人盤いさこゝ路もしらすふる佐と八花曽む可志の香耳尓本比介類

毎回締め切りに追われながらの作品制作ですが、なかなか気に入るようには書けず、何度も書き直すこともあります。しかし、書き直すほどに精彩を欠くことになります。

作品制作では、「これだ！」と思えるものを書きたいものです。その「これだ！」と思えるものを引き出すために、日頃からその力を蓄積しておかねばなりません。

これからも一回限りの表現だからこその「書」を求めていきたいと思います。

学び方

歌意…人の心はわからないが、昔なじみの地に来てみると、梅の花は昔ながらの香りそのままに咲きにおっている。

今月の華雪先生の構成は、二行目をかなり上部でまとめています。左下部分を、ここまで空けて落款を並列しているところは、なかなかまねできるものではありません。大胆な余白は、華雪先生ならではです。

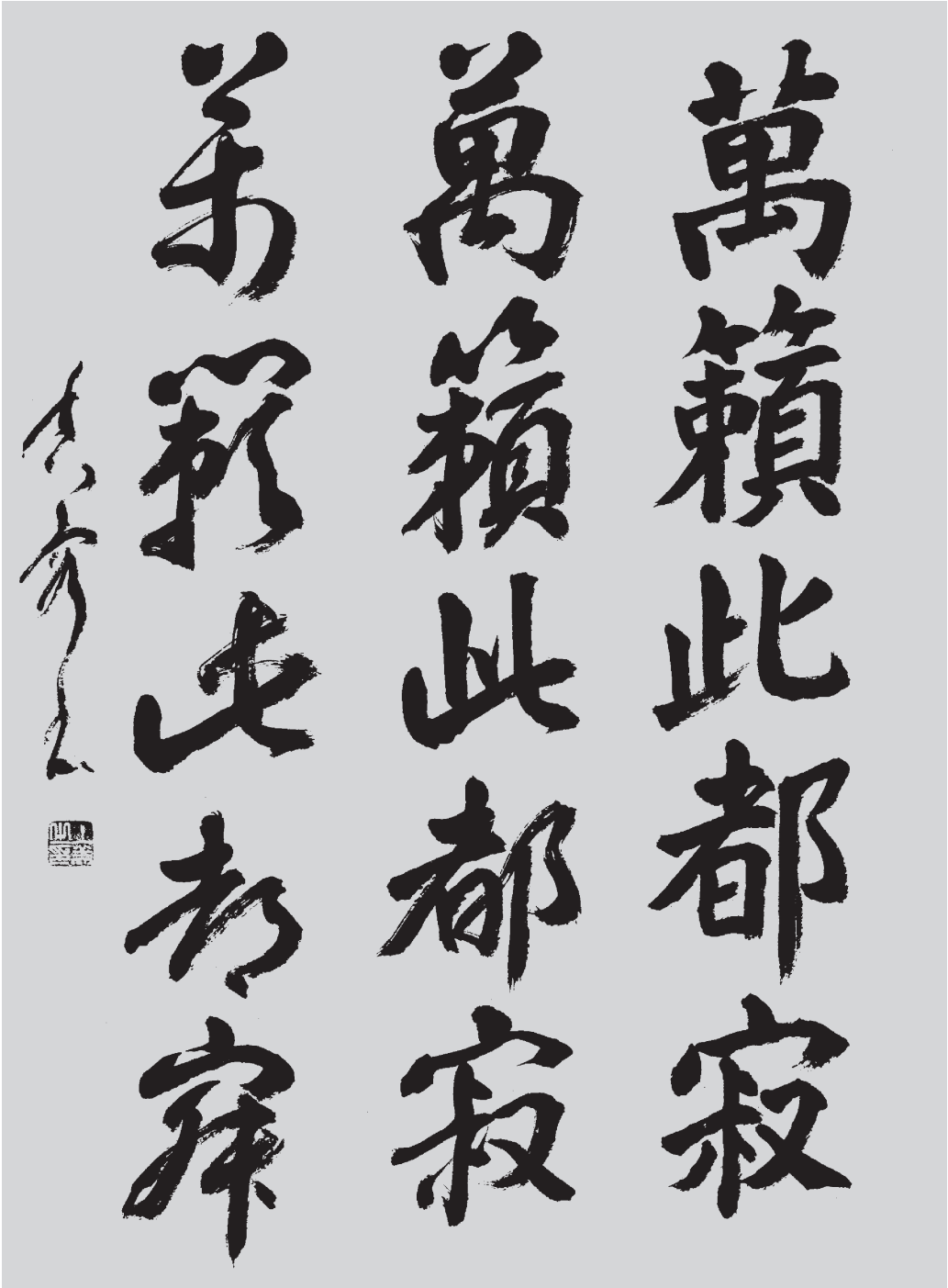
今月の私の構成は、シンプルに二行書きで、流れは自然に任せ、字体の太細・大小で変化をつけ、二行の照応を試みました。「し」と「耳」の縦の線をほぼ並列に布置したところは、線質にもっと明らかな変化をつける工夫が必要かと反省しています。

予告（四月二十二日締切）　**花は散りその色となくながむればむなしき空に春雨ぞふる**（新古今和歌集　式子内親王）

◆**注意**　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第二部漢字課題　（三月二十二日締切）

川上香蓉先生書



萬籟此都寂（常建）
万籟　此に都て寂として、

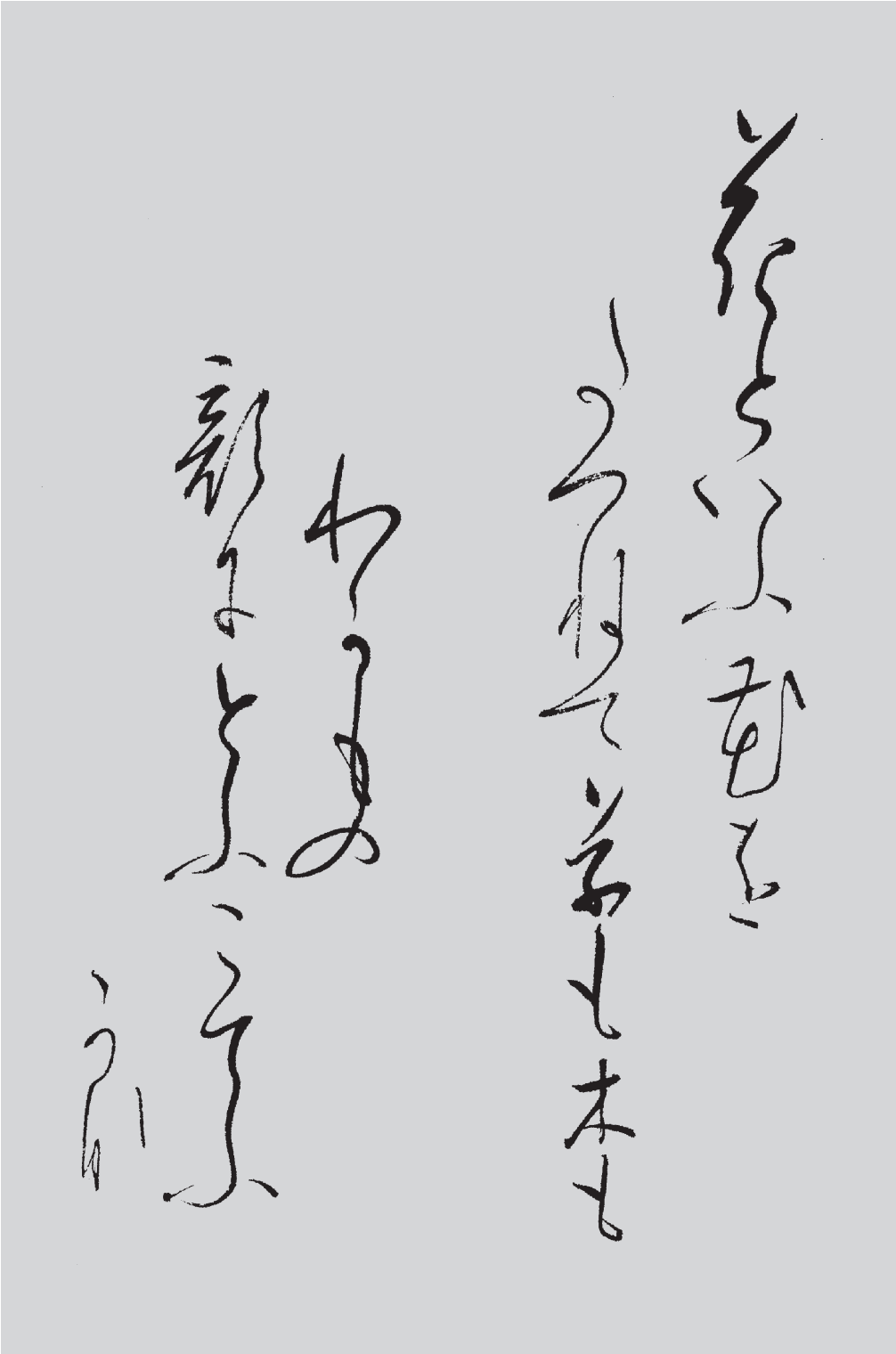
訳…すべての物音がここではひっそりと静まり、その静寂の中に鐘と磬の音だけが聞こえてくる。※〈万籟〉万物がたてる物音。

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第二部かな課題　（三月二十二日締切）

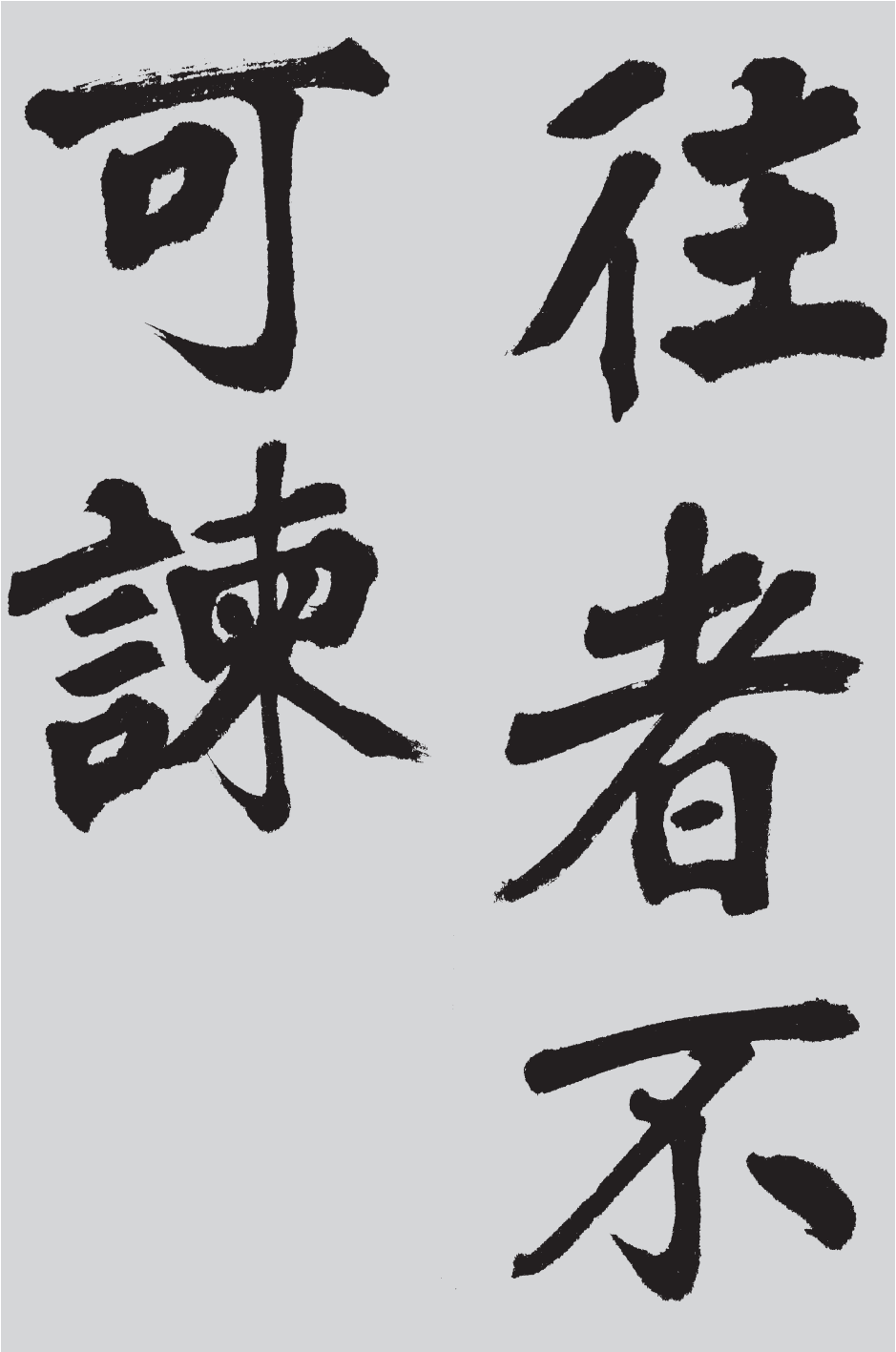
高塚竹堂先生書

花といふ花をたづねて草も木もわがもの顔にとぶ胡蝶かな（重胤）



◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第三部漢字課題　（三月二十二日締切）



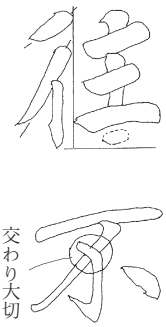
平岡華雪先生書

往者は諫（いさ）むべからず（論語）

訳…過ぎ去ったことは改めようがない。

〈明快性の根幹〉

長横画、長縦画、長斜画が多い。線の伸長は字形の根本。筆を立て、鋒先を利かせ暢びやかに運筆し明快性を表出してほしい。



交わり大切

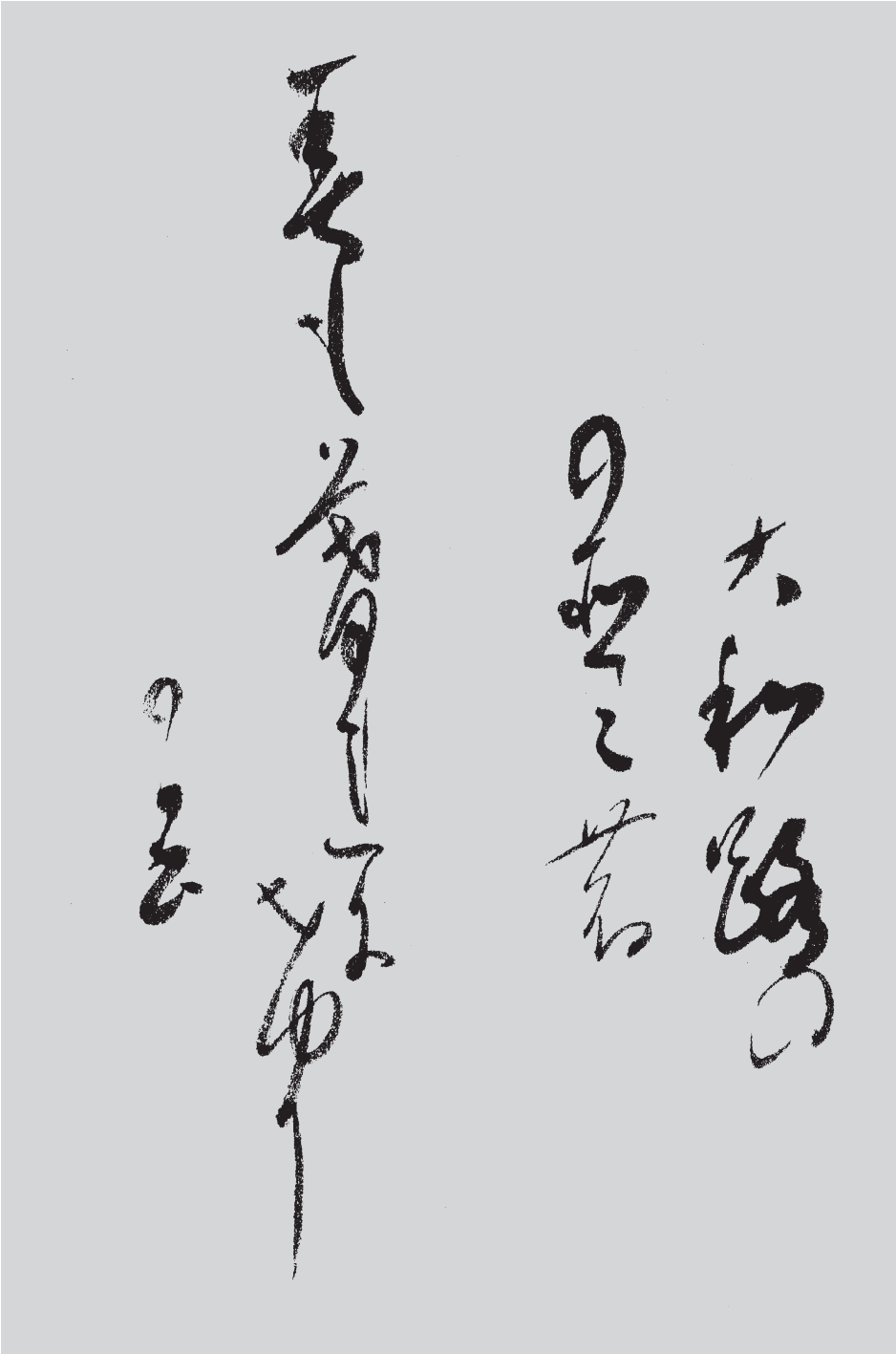
◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇試第三部かな課題　（三月二十二日締切）

平岡華雪先生書

大和路の望の春も暮にけり（智月）

大和路のの所三農春も暮連尓希り



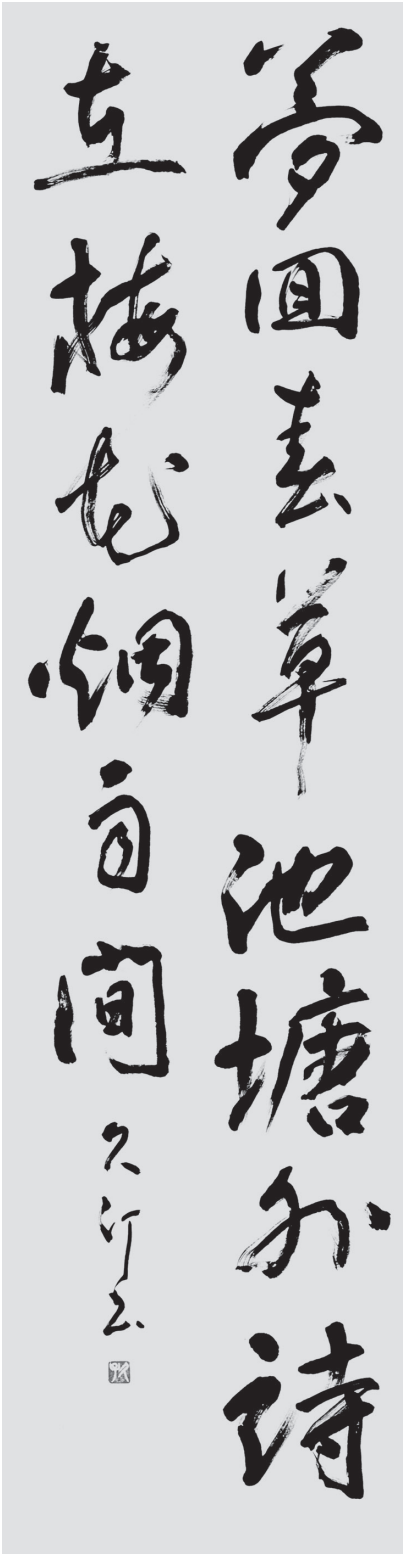
「**路の**」の重ね書きは特に線の変化に工夫のこと。同調線では、却って重く暗くなり易い。

「**春も**」の二字連綿内の筆意、二画目の細いタテ画が鋭く効果、「春」の末筆から「も」への浮かしの連綿、初歩的ながら大切。

「**希り**」の寄せは終末の締めとしてポイント。

◆**注 意**　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

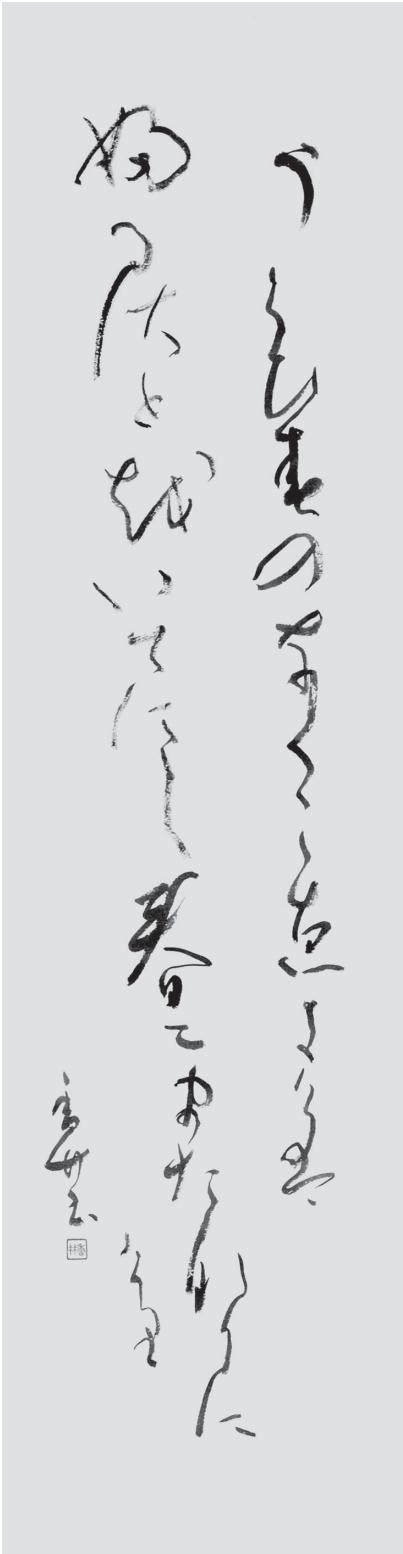
笹崎久汀先生書



夢回春草池塘外。詩在梅花烟雨間（楊公遠）
夢は回る春草池頭の外、詩は梅花烟雨の間に在り。

訳…夢は春草の萌えそめた池塘の外に春を知り、詩は梅咲く細雨の中にある。

青柳香竹先生書



鶯のなく声きけばふる里をいでにし春にまたなりにけり（熊谷直好）
う久ひ春の奈くこ恵支介盤婦る佐と越いてにし春二また那りに介里

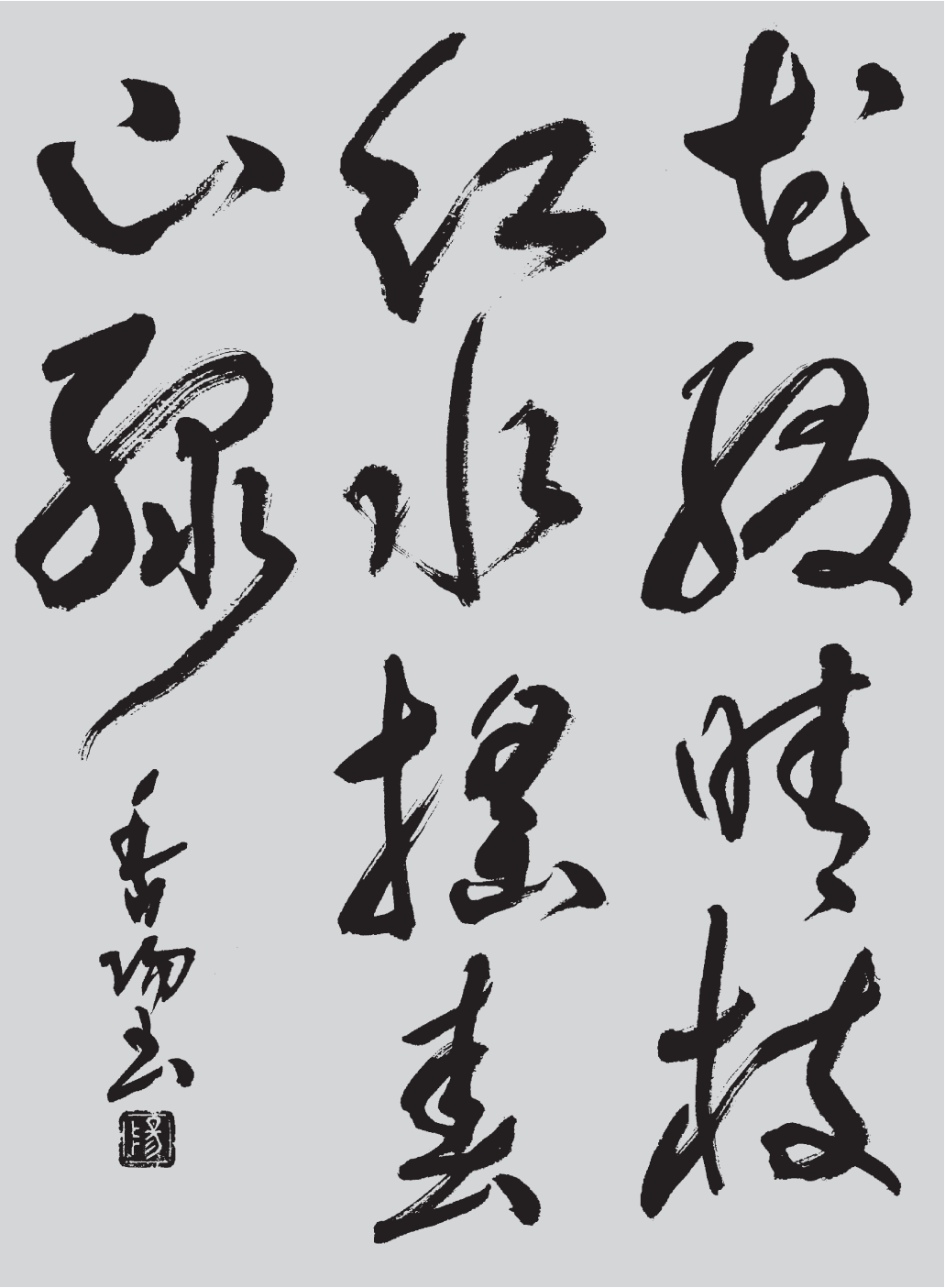
◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

昇　試　随　意　参　考

福田香陽先生書

花綴晴枝紅　水揺春山緑（知遜）

花は綴る晴枝の紅、水は揺く春山の緑。



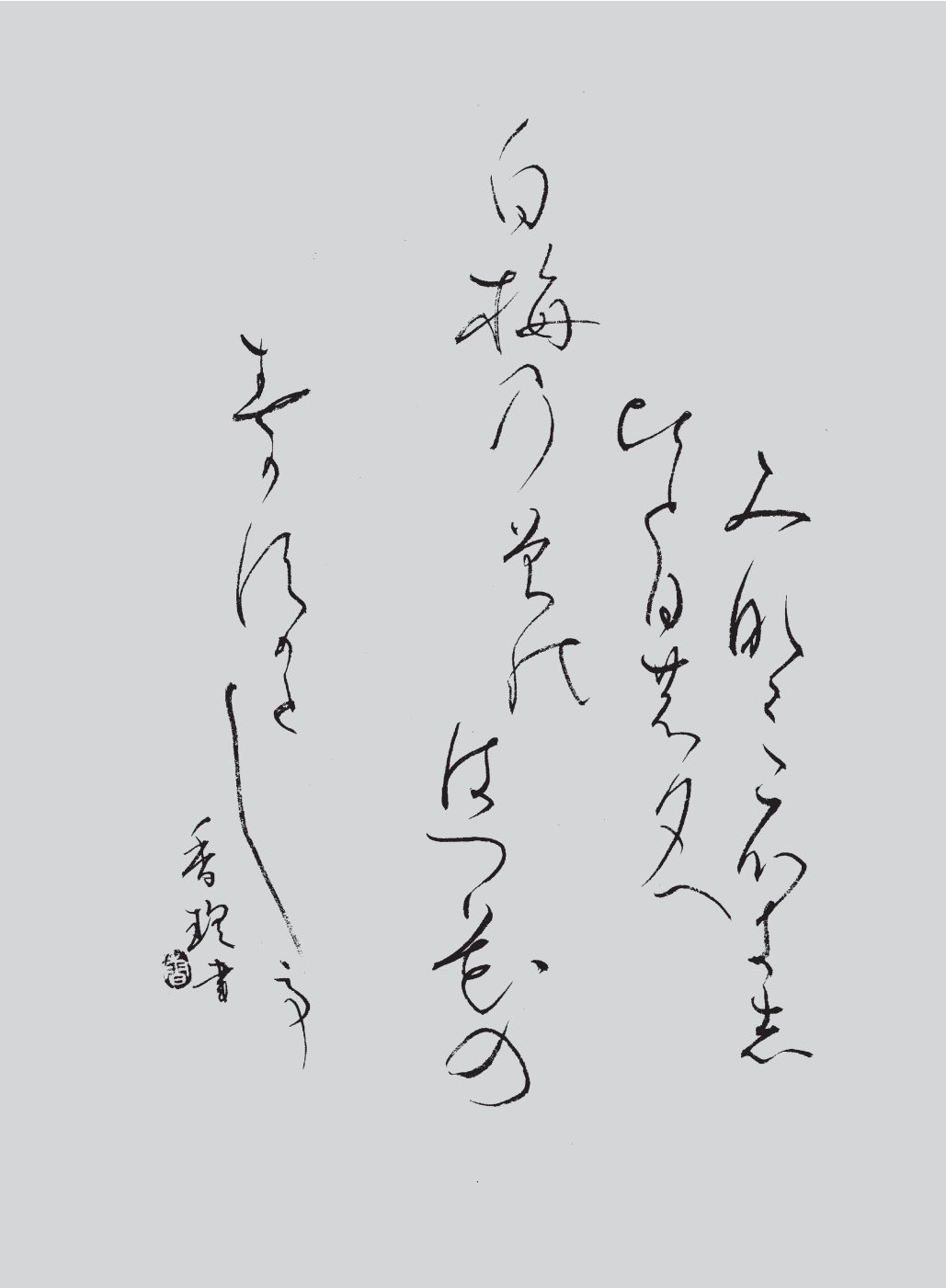
訳…花は美しく玉を綴ったように晴れた枝に赤く咲き、水は春山の影をうつして緑を動かすのである。

◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

内藤香瑶先生書

南吹きし一日の夕べ白梅のそのはつ花のすがすがとして（土屋文明）

美那三不支志ひと日農夕へ白梅乃曽能はつ花の春可須可とし亭

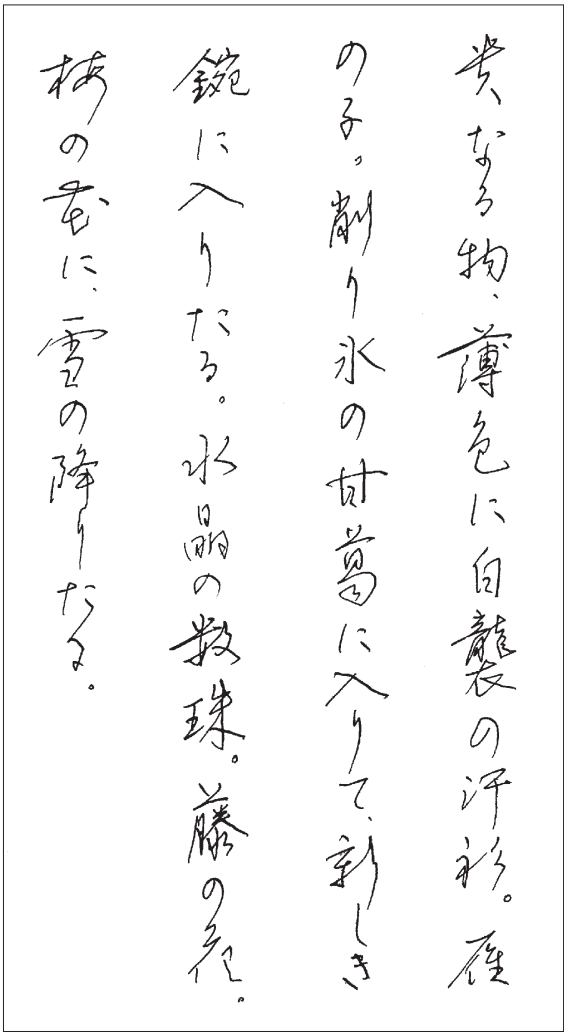


◆注 意　裏表紙の昇試規定を参照のこと。

硬筆部課題参考　（三月二十二日締切）

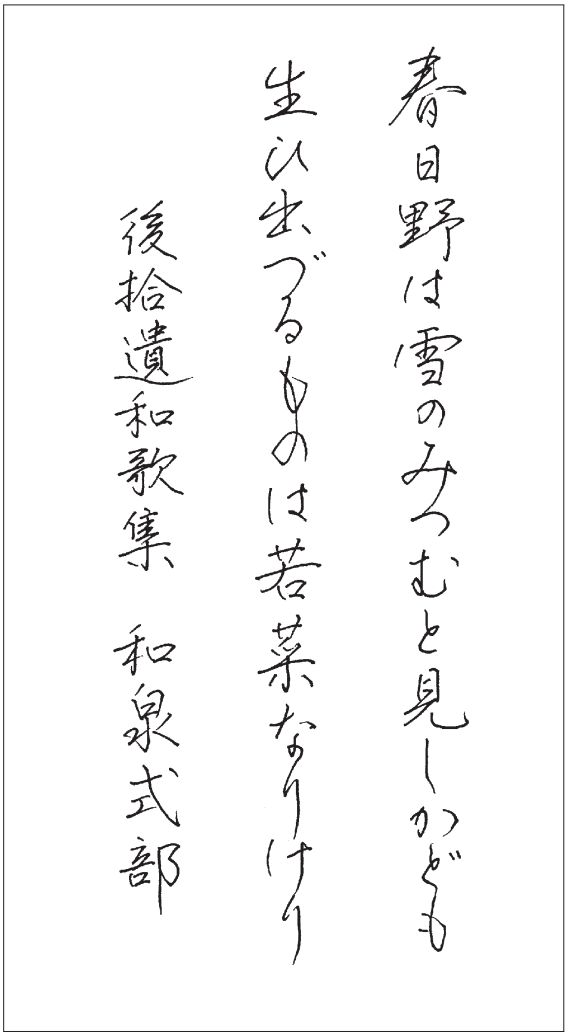
石原春香先生書

課題 1　（初段以上）



赤木典子先生書

課題 2　（初段格以下）



課題1（初段以上）

貴なる物、薄色に、白襲の汗衫。雁の子。削り氷の、甘葛に入りて、新しき鋺に入りたる。水晶の数珠。藤の花。梅の花に、雪の降りたる。

（『枕草子』清少納言）

〔現代訳〕上品なもの、薄紫色の上衣に、表裏とも白の汗衫を着た童女の装い。薄黄色の軽鴨の卵。削った氷の塊が、甘い「あまずら」の汁の中に浮かんでいて、新しい銀色の器に入れてあるもの。水晶の数珠。藤の花。梅の花に、雪が降りかかっている景色。

◆注意

(1) 自分の段級に合った課題を選択。

(2) ペンまたはボールペン（黒色）を使用のこと。青インクは不可。

(3) 段級欄は本人が記入（色は黒）

(4) はじめて出品される方は私製の紙（3×4 cm位に）次の4項目を記入して作品左下隅に貼って出品して下さい。①硬筆部②支部名または都道府県名③氏名または雅号④新

(5) 会員は無料・会員外は四六〇円

課題2（初段格以下）

春日野は雪のみつむと見しかども
生ひ出づるものは若菜なりけり
後拾遺和歌集　和泉式部
（出典も課題に含みます）